

対象関係の評価尺度作成の試み(1)

—原子価 (Valency) からみた関係性の理解—

福岡大学大学院 人文科学研究科

日高崇博

I. はじめに

われわれは複雑に絡み合う「関係性」の中に生きている。親や友人といった「個人」との関係性、学校や職場といった「集団」との関係性など、個人を関係性から切り離して捉えることは不可能である。そのため、多くの心理療法では、個人がどのような関係性を示すか適切に把握し、関係性の文脈の中で心理的な問題や悩みを扱うことが求められる。

この状況をもっとも具体的に提供するものが集団療法である。集団療法には、個人と集団の心理はつながっているという考え方を基本として、個人療法だけでは得られないより生きた関係性の中で問題や悩みを扱うことができる。そこで治療者は、集団心性の状況を見極め、個人の全体無意識への転移、全体無意識から個人への転移、治療者への転移、集団成員同士の転移を理解し介入するという役割を担わなければならない (Ganzarain; 高橋, 1996)。つまり、集団内で繰り返される、個人と個人、個人と集団、そして集団と集団の関係性を扱うということになる。

さらに、集団療法実施前に個人が示しやすい関係性を見立て予測することが必要であると考えられる。しかし、これらは容易な作業ではなく、臨床家や治療者の経験や習熟を必要とする。また、主観的判断に委ねられるところが大きく、計量的な実証性にも欠けていると考えられる。従って、個人療法、集団療法に限らず関係性を含めた個人にアプローチをするための客観的な指標、あるいは基準が必要となる。特に、心理的援助を行う前の情報収集や心理査定段階において、個人や集団に対して示しやすい特性を予測することは臨床実践において重要である (内田, 2005)。なぜなら、個人の特徴が明らかになれば治療者としての視野が広がり、適切な介入ができると考えられるからである。

そこで本稿では、指標作成に向けて関係性を包括する精神分析的な概念である対象関係論 (object relations theory)、特に Bion の原子価 (Valency) の視点から関係性を概観する。第2報以降では、原子価の理論に基づいた尺度を作成し、そこで得られ

た指標が臨床実践において有用であるかどうか検討していきたい。

II. 対象関係論

関係性を包括する精神分析的な概念として「対象関係論 (object relations theory)」がある。対象関係論は、古典的精神分析から派生した立場であり、その発端は Freud にさかのぼることができる。Freud の精神分析における方法論を忠実に徹底し、本格的に展開されたのが英国の精神分析家 Klein M (1882-1960) である。

Freud の精神分析理論では、「対象を生物学的な本能充足の手段であると位置づけ外的現実の親子関係から内的な超自我・自我という構造が生まれる」としている (北山, 2001)。一方で Klein は、「自我は本来、対象希求的なものであり、自我と対象 (必ずしも人とは限らない) との関わりは一義的なものである」とした (松木, 1996)。つまり、対象との関係性のあり方には、発達に伴い様々な不安が生じ、その不安を体験し乗り越えることで関係性は変化する。

特に Klein は、分析の対象を言葉での自由連想法を用いることができない幼い子どもに向けた。その方法は、子どもを自由に遊ばせることで、そこにある無意識の空想 (phantasy) を解釈するというものであった。Klein はエディプス期以前の子どもを対象にし、乳児の心性、乳児水準の無意識の空想を見出した。それらは、内的現実、内的世界、内的対象と呼ばれ、外界とは区別された心的3次元空間の世界であった。内的世界 (internal world) とは、心の中のイメージであり夢や空想で表現される三次元的世界である。内的世界と区別される外的世界は、実際に住んでいる世界で具体的な世界のことである。自己と他者との区別がない自己愛的対象関係から、対象の一部を認識する部分的対象関係を経て、対象が統合された全体的対象関係へと進むとされる。つまり、その人の在り方は、内的世界の対象関係に明確に規定されるというものであった。また、乳児の心的世界には、原始的な感情や心的機制が

働いていることも見出し、「投影同一化 (projective identification)」や「分裂 (splitting)」などの原始的防衛機制、及び発達を定式化した「妄想-分裂的態勢 (paranoid-schizoid position)」や「抑うつ態勢 (depressive position)」の概念を提唱した。

その後、対象関係論は大きな広がりを経て、Klein の考えを継承する Klein 学派 と Fairbairn WRD(1889-1964) や Winnicott DW(1896-1971) らの見解からなる狭義の対象関係

論に分かれた。これらの理論は、早期母子関係を重視すること、また個人と対象との外的現実の関係だけでなく、内的な対象との関係をも理解するという点が共通している。一方で、欲動が方向付ける自我と対象の関係の仕方や、内的対象と外的対象の取り扱い方に違いを見出すこともできる。北山(2001)は、『精神分析理論と臨床』の中で対象関係論の影響を受けた精神分析家を記述している(表1)。

表1 対象関係論の分類

内的な対象関係論	Freud S の欲動論 Klein M
外的な対象関係論	対人関係論と呼ばれる Neo-Freudian(Erikson EH や Bowlby J を加えても可)
外的関係が内在化された対象関係論	Fairbairn WRD Guntrip H
内外を重視する対象関係論	Winnicott DW Bion WR Kohut H Freud 初期の外傷理論
欲動論から距離をおくもの	Fairbairn WRD Guntrip H
欲動論を取り込んだもの	Klein M Bion WR Winnicott DW Balint M.

北山(2001)より作成

III. Bion について

Klein 学派の流れをくむ Bion WR(1897-1972)は、Freud や Klein の業績のあとをたどりながら、独自の方法で理論を展開し、人間の心の機能、心的発達、精神病理学を理解するための幅広い領域への道を開いたと称されている。Bion はあらゆる心理学は、最終的に社会心理学であるという Freud 的な信念を共有し、精神分析的研究を通して個人心理学と集団心理学は2つの異なる研究分野ではなく、同一の研究分野であると強調した。

また、人間は生まれながらにして社会的な動物であり、誰も集団に属することから避けることができず、集団の存在なしに個人は生きていくことができないとし、個人と個人の関係性だけでなく個人と集団との関係性についての重要性も指摘した。

数ある理論の中で Bion 自身の記述は少ないが「原子価 (valency)」の概念は関係性を理解する上で多くの仮説や事実の発見に大きな寄与をもたらした。本章では、Bion や他の研究者によって記述された原子価とその周辺概念について整理し概観する。

1. 原子価 (valency)

Bion(1961) が提唱した理論の中でも、「原子価」の概念は関係性を理解する上で多くの仮説や事実の発見に寄与をもたらした。原子価は、集団力学(group dynamics) と集団精神療法における最も独創的な概

念の1つであるとしている(Hafsi,2004)。

Bion(1961)は、個人の関係性を明らかにするために化学用語である「原子価 (valency)」を借用し説明を試みた。その際、原子価を「確立した行動パターンを通じて他者と瞬間的に結合する個人の能力」、また「基底的想定 (basic assumption) を創り出し、それに基づいて行動するために、集団と結合していくための個人の準備状態」と定義している。さらに、原子価の重要性や普遍性を強調するために「全ての人に原子価があり、原子価のない人は、精神的機能からみればもはや人間ではない」としている。

原子価には依存 (Dependency)、つがい (Pairing)、闘争 / 逃避 (Fight/Flight) が存在する。これは、個人が1つの類型しか示さないという意味ではなく、全ての原子価を示すというものである。

Hafsi(2005)は、原子価を明瞭化した説明を試みている。まず、闘争 / 逃避を分類し4つの類型に別けた(表2)。また、個人にとって主要な原子価を「活動的原子価 (active valency, 以下 ACV)」とし、他の3つは「補助的原子価 (auxiliary valency, 以下 AXV)」としている。ACV が対人関係や集団との関係性において個人が示しやすい原子価の特性である。AXV は何らかの理由で ACV の表現が不可能な場合に補助的に用いられる原子価である。AXV には「適応機能 (adaptative function)」と「補助的機能 (supportive function)」があると考えている。

表2 各原子価の特徴

分類	特徴
依存 (Dependency)	縦的対人関係や相互作用の依存を好み、低い自己評価と他者の過剰評価を示す。色々な意味で他者が自分よりも優れていると意識的・無意識的に考えるので、その人と繋がるためには、その人に頼っていくことしかないかのように振舞う。逆に、自分より劣っていると見なされる人に対しては、同一化による共感を示し、相手の依存を受け入れ満たそうとする。
闘争 (Fight)	対人関係において自己主張し、攻撃性や競争心を示し、相手を批判する。競争や批判をすることで他者と繋がろうとする。
逃避 (Flight)	葛藤回避や過剰な遠慮を示し、距離感を保つことでプライバシーを守る。葛藤のない対人関係を好んだり結ぼうとし、葛藤が生じたら逃げる。また、依存することも好まらず、一見して内向的かつ冷たそうに見える。
つがい (Pairing)	温かく親しい対人関係を好み、相手と主体的に付き合いたいという願望を抱き、大集団より小集団を好む。民主主義、平和主義、関係を性愛化しやすい。

Hafsi(2005)を参考に作成

この2つの機能は関係を維持するための手段であると同時に、変化する防衛的手段であるとした。ただし、AXVはあくまでも補助的な存在であり、自分自身に最も適したACVを使用できない状況が続けば何らかの問題が生じてしまうと考えられる。図2は、原子価のACVとAXVによって形成される関係性のイメージを筆者が作成したものである。

2. 「-原子価」

Bion(1961)は、原子価の普遍性や重要性について「原子価を持っていない人は精神的に生きてはいない。そして、精神的に生きていない人も存在しない」と強調した。なぜならば、部分的にせよ、慢性的精神病に苦しんでいる人でさえも対象(奇怪な対象)と繋がろうとする、あるいは繋がっているからである。つまり、人として存在する限り関係性は切り離すことができないということになる。

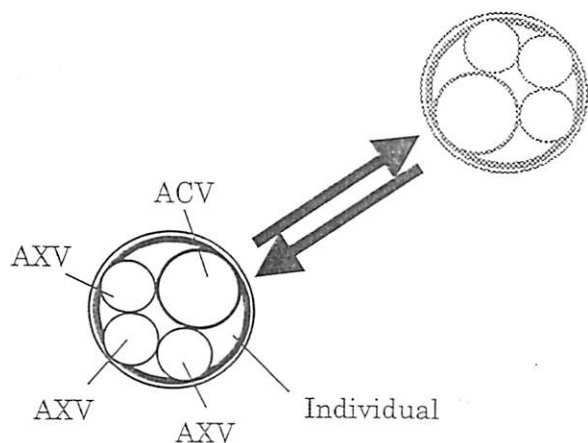


図1. 個人と個人の関係性

そこで、Hafsi(2005)は正常な人と病的な人との説明をするために、原子価の正常な面と病理の面に着目し分類した。健康的で正常に機能している原子価を「+原子価」、不健康で病的に機能している原子価を「-原子価」として区別した。機能的な「+原子価」にはそれぞれ1つの対照的な非機能的「-原子価」がある(表3)。

「+原子価」はBionの提唱した原子価に相当し、正常な対人関係を築くための機能である。一方、「-原子価」は対象の反応を考慮せず、厳格に1つのACV機能のみに頼り、関係を結ぼうとするものである。つまり、原子価が逆に機能している状態で、個人が一方的かつ攻撃的に対象と繋がることによって対人関係を破壊し、結果として関係性は築けない。「+原子価」は個人と対象との関係性を結ぶのに対して「-原子価」は個人と対象との関係性を切り離すのである。表3は、各「-原子価」の特徴を記述したものである。

3. 原子価の発生論

Hafsi(2006)は、原子価を精神分析の概念として用いるためには、まず精神分析、特に対象関係における精神発生論を明らかにすることの必要性を提唱し、原子価が早期の対象関係の所産であると考えている。すなわち、Kleinによって記述された妄想-分裂的態勢、抑うつ的態勢、前エディプス期、エディプス体験(Pre-Oedipus complex)を通じて、対象とのつながり方を徐々に学んでいくというものである。

「依存」原子価の発生には、妄想-分裂的態勢が大きな影響をもたらす。妄想-分裂的態勢では、身

表3. 各「一原子価」の特徴

分類	特徴
依存 (Dependency)	無力感、自尊心の欠如、自己批判、過剰され、安心させられたい過剰な要求と期待、拒絶や見捨てられる不安等を示す。
闘争 (Fight)	主体の社会的環境に対する意識的・無意識的かつ強烈な不信感、敵意、自己中心的態度、他者の操作、人に対する批判と無考慮の態度、人間の肯定的かつ基本的感情(愛、同情、友情等)の欠如、過剰な自信、万能感を示す。
逃避 (Flight)	非常に疑い深く、冷たく近寄りたく見える。他者との間に壁を作り、あらゆる親密な関係を避ける。また、無表情、人や物への依存に対する極端な嫌悪や拒絶、消極的な非順応性を示す。
つがい (Pairing)	対人関係における親密性の過剰な要求、他者の私生活に対する異常な好奇心と注目の要求、関係を性愛化しようとする異常な傾向を示す。対人関係の成立のためには誘惑や性が不可欠な要素である。

Hafsi(2005)を参考に作成

体的かつ精神的な未熟さゆえに、現実によって引き裂かれる不満や内部の死の本能による不安に直面する。それに対して自我は分裂、投影同一化などの防衛機制を用いる。その結果、乳児は「良い対象」と「悪い対象」を体験する。乳児は内部に残った攻撃衝動を悪い対象に向け、内的世界への侵入を防ごうとする。一方で、良い対象にもリビドーを向け、すべての欲求の源を取り入れようとする。このような対象との限らない関係を通じて、乳児は何もせずに良い対象の介入を待つだけでよいということを徐々に学んでいく。言い換えれば、乳児は依存することで良い対象と関係ができ、快感や安心感を体験できることを繰り返し学ぶことで「依存」原子価は発生する。

Klein が述べるように、良い対象との関係は長く続くことはなく、対象に対する羨望が生じる。この羨望が「闘争」「逃避」原子価の発生に影響していると考えた(Hafsi,2005)。羨望によって乳児は、良い対象を妬ましく思い、羨望を起こさないように良い対象を破壊し、その代わりになりたいという願望をもたらす。このような羨望を対象に投影することによって、対象を攻撃的なものとして体験し、恐怖や不安に襲われる。このような体験の所産によって「闘争」「逃避」原子価は発生するとしている。

「つがい」原子価の性愛的な側面を考慮すると、つがいの根源は両親のリビドーによる連結を認識できるようになる前エディプス期にあると仮定している(Hafsi,2005)。この段階において乳児は、両親が終わりのない性行為を行い、口唇愛的、肛門愛的、性愛的快感を与え合っているという幻想を抱く。また、幻想において乳児は、父親の現実的または幻想的なペニスを取得し、自分の攻撃によって破壊してしまったと考えられる対象、及び対象との関係を償

おうとする。「つがい」原子価は両親の連結とペニスに関する乳児の幻想の所産であるとしている。

4. ACV/AXV の決定

特定の原子価を好み、関係性の中で示し始めるのはエディプスコンプレックス(Oedipus complex)の後期から潜伏期初期であるとHafsi(2006)は仮定している。エディプスコンプレックス前期に達している乳児には、特定の原子価が存在せず、異性の親に対して依存の原子価とつがいの原子価を、同性の親に対しては闘争の原子価と逃避の原子価を用いる。エディプスコンプレックスを克服し、潜伏期を迎えると、しつけを通じて社会的な規範やルールを学んでいく。その中で、両親(特に母親)との関係、あるいは他者との関係を形成するための社会的な基準を体験していく。その基準に従わなければ、母親の愛情を受けることができなくなるため、母親の基準に従うことになる。母親が乳児にもたらす基準は自分自身のACVが反映されているため、乳児は自ずと母親のACVを取り入れることになる。その結果、乳児は母親と同一のACVを示すようになるとしている。

5. 原子価と集団(Group)

精神分析的な視点で集団に言及したのはFreud(1921)が最初である(Hafsi,2003)。ここでの「集団(group)」という用語は、ただ特殊な心的活動を包括するものであって、それに携わる人を意味するものではない。Freudによれば、集団内に存在する関係の原型はエディプスコンプレックスの発達段階を特徴付ける関係であり、集団における感情的特徴の本質は神経症的なものである(Freud; 井村訳,1970)。

これに対してBionは、Kleinの「妄想-分裂的態勢」

及び「抑うつ的態勢」における迫害不安や幻想の概念、または投影同一化、否認、理想化、償い等を含む原始的防衛機制の概念を応用しながら、独自の集団理論を発展させた。

Bionによれば「すべての集団は、偶然であるかもしれないが、何かを“為す”ために相会する」としている。つまり、全ての集団は、その基本的作業(basic task)を遂行するために、集団成員に対しそれぞれの能力に応じた基本的作業への「協同」が期待され、訓練や経験、作業に関する知識や技術も必要とされる。基本的作業に従事する集団には、常に2種類の状態があり、どちらかが支配的である。Bionはそれぞれを「作動グループ(work group)」と「基底的想定グループ(basic assumption group)」と名付けた。図2は、個人の示す原子価と集団との関係性をイメージを筆者が作成したものである。

作動グループの特徴は、基本的作業への集中、メンバーの共同、合理的・科学的方法を用いること、時間や発達を意識しながら作業を行うこと、作業をすることにもなう欲求不満に耐えられることである。集団における活動は、常に作動グループに特徴付けられるような心的側面が持続する訳ではない。集団の発達や維持のためには作動グループの機能は必要不可欠なものだが、作業に従事するという苦痛が伴う。そこで、作動グループと共存する無意識、衝動、幻想に基づくもう1つの心的側面である基底的想定グループによって苦痛を回避しようとする

る。その結果、作動グループは基底的想定グループによって阻止され支配される。基底的想定グループには原子価と同様の類型に分けられる(表3)。共通する特徴は、リーダーシップのスタイルとそれに対する集団成員の態度、集団成員同士の関係と集団外部との関係、時間の概念、経験から学ぶ能力の欠如等が示される。基底的想定グループの活動に参加し、寄与するためには基底的想定グループの類型と一致する原子価を持たなければならない。

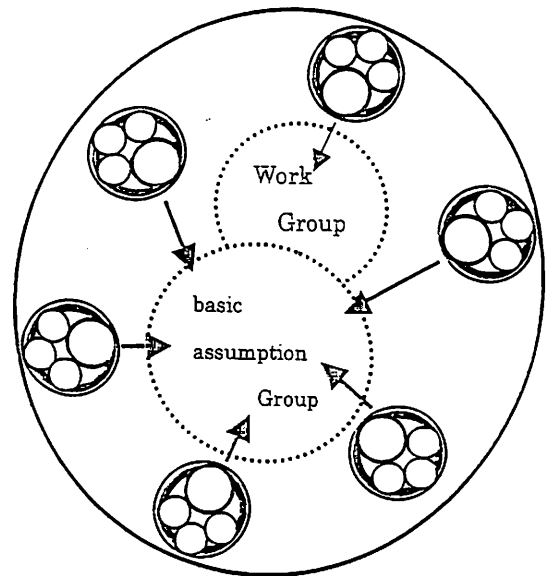


図2. 個人と集団の関係性

表3. 各基底的想定グループの特徴

分類	特徴
「依存」 基底的想定グループ	リーダーは全知全能であり、グループ自身は未熟で助けを必要とするという幻想を抱く。それに伴い、メンバーそれぞれがリーダーと独占的な関係を持つという信念を抱く。リーダーが依存的なニーズと期待に応じようとしないとき、グループはリーダーの存在の否認とその過小評価を示し、新しく依存的なニーズを満たしてくれるリーダーを求めようとする試みを繰り返す。グループとして機能するためには、「依存する人」と「依存される人」によって作り出される「依存関係」の存在が必要である。
「闘争/逃避」 基底的想定グループ	存続にとって脅威であると感じられるグループ内・外の誰か、あるいは何か(幻想的な敵・グループなど)と戦うか、あるいは逃げるしかないという幻想を抱く。リーダーには、危険と敵を識別し、その敵と戦うか、あるいは逃げるかに対して能力を発揮できることが要求される。「今ここ(now and here)」において敵が存在しない場合は、敵を作り出すことさえ期待され、グループ全体の存続のために全力を尽くすことが期待される。
「つがい」 基底的想定グループ	グループにとって重要なのは「つがい(pairing)」そのものではなく、その「つがい」によってもたらされる幻想そのものである。つがいから誕生する救世主には不安と恐怖からグループを救ってくれるという期待が掛けられている。そのため、グループは2人の幻想的な性的関係に注目しながら待ち続ける。しかし、希望は決して完全には満たされてはならない。

Hafsi(2003/2004)を参考に作成

IV. 展望

1. 原子価の視点からみた「関係性」

原子価の視点から関係性を捉えると、関係性のあり方には4種類が存在することになる。個人にとって最も重要で支配的な原子価であるACVは変容することのない対人関係のベースとなる特性になる。しかし、一方的に自分のACVに即した個人や集団との関係性の形成は、「-原子価」として機能してしまい関係性の喪失、あるいは破壊につながり適応的であるとはいえない。ACVの特性だけでは関係性の維持と形成が困難な状況に陥った場合にはAXVを的確に機能させなければならない。ACVとAXVを把握し、関係性の形成のスタイルを洞察し、スキルとして習得できればそれぞれの原子価を「+原子価」として機能させることにつながると期待できる。

また、関係性は、対象があって成立するものである。言い換えれば対象との複雑な状況や力動によって変化するものである。個人の対人関係における特性だけでなく相手の特性や状況に即した関係性を形成することが求められるのである。関係性について検討を深めるのであればやはり二者心理学的な視点に立ち、複雑な力動によって左右される関係性に個人がどのように対応して適応するのかということが重要になるのである。自分自身の原子価だけでなく、相手の原子価の特性についても考えることができれば、より補完的に関係性を形成できると考えられる。

原子価は集団にも応用できる。Bionは1940年から1945年までの間、Northfield病院で集団精神療法を用いて戦争神経症や他の病理の患者のリハビリテーションを行った。またTavistock Clinicでの実験によって集団に関する業績を残し、その中の1つが原子価である。つまり、集団との関係性によって個人に着目したことになる。原子価は対人関係場面だけでなく、既述したような集団理論が背景にあるため、集団を1つの対象として関係性を理解するための一助としても応用可能であるということである。“個人と個人”だけでなく“個人と集団”の関係性の検討に示唆をもたらすと考えられる原子価は、個人を取り巻く関係性の理解により大きな一助をもたらすのではないかと考えられる。

2. 原子価の臨床的適用に向けて

これまでの心理臨床の現場では、対象関係の評価は面接を通じて行われることが一般的であった。Bellak et al (1973)は、①自己・他者の関係の種類

と程度、②成熟・発達の程度、③自己・他者の分化の程度、④対象恒常性の4つの側面ごとに面接用の質問項目を用意し、これらを全体的に評価して対象関係を査定する方法をとっていた。投映法検査にも一定の客観的基準を設けて評価する方法があり、Urist(1977)はロールシャッハを、Westen(1991; 大矢, 2003)はTATを用いてそれぞれ対象関係を評価する指標を提案している。

一方で、質問紙による対象関係を捉えようとするアプローチはほとんど見当たらない。質問紙法の良否は客観的で信頼性・妥当性が高いことにあるという考え方に基づき、可視的に判断できない深層や無意識を心理テストの対象にすることには難があると考えられているためである。しかし、馬場(2002)は、自我の防衛活動や対象関係、つまり精神力動を司る中心的な内的活動は、外に現れる態度や行動の傾向や偏りとして観察可能であり、内的活動のあり方を質問紙検査によって把握を試みようとしている米国の現状を報告している。

同時に、馬場(2002)は、精神分析的理論を質問紙法において実証することの限界も指摘している。実証が難しいのは、無意識だからというより、個別性が著しいからであり、実証的・統計的研究によって精神力動的理論が実証されるというのは、あくまでも制限付きで、臨床的にはスクリーニング法としての役割しか果たさないというものである。これらの指摘から加味すると、質問紙法は、元来の精神力動的な人格理解、つまり解釈と推論を行う際の指標を提唱することは可能であるということである。

今後はこれらの指摘を踏まえた上で、Bionの原子価に準拠した質問紙を作成する。また臨床実践を通して、援助者の解釈と推論の一助となるか検討していきたい。

文献

- 馬場禮子(2002) 精神力動的理論の実証的研究に関するコメント 精神科診断学 13(3) p311-316.
- Bion WR (1961) Experience in Group and other papers. London : Tavistock. New York : Basic Books. 池田数好(訳)(1973) 集団精神療法の基礎 岩崎学術出版社.
- Freud S (1921) Group Psychology and the Analysis of the ego. 小此木啓吾訳(1997): 集団心理学と自我の分析 フロイト著作集 6 人文書院.
- Ganzarain R 高橋哲郎監訳(1996) 対象関係集団精神療法 岩崎学術出版社.
- Grinberg L, Sor D and de Bianchedi ET 高橋哲郎

- 監訳 (1982) ビオン入門 岩崎学術出版社
- Hafsi M (1997) Developing a Japanese Version of the Reaction to Group Situation Test(RGST). 奈良大学紀要 25.
- Hafsi M (2003) ビオンへの道標 ナカニシヤ社.
- Hafsi M (2004) 「愚かさ」の精神分析 - ビオンの観点からグループの無意識を見つめて - ナカニシヤ社.
- Hafsi M (2005) ビオンによる『原子価』の再考、明瞭化と展開 - 対象関係の化学の探求 - 奈良大学紀要.
- Hafsi M (2006) Caught In The Trap of Projective Identification: Enacting the group's basic assumption of dependency. Graduate School of Nara University No.11, March 2006
- Hafsi M (2006) The Chemistry of Interpersonal Attraction: Developing further Bion's concept of "valency" Memoirs of Nara University No.34, March 2006
- 北山修 (2001) 精神分析理論と臨床 誠信書房.
- 松木邦裕 (1996) 対象関係論を学ぶ - クライン派精神分析入門 - 岩崎学術出版社
- 松木邦裕 (2004) 現代のエスプリ別冊 アールアバウト メラニークライン 至文堂
- 松木邦裕 (2005) 対象関係論の基礎 新曜社
- 松木邦裕 (2006) 対象関係論的心理療法入門 金剛出版
- 大矢泰士 (2003) TAT(主題統覚検査)における対象関係のアセスメント 臨床心理学研究 東京国際大学大学院臨床心理学研究科 創刊号 2003年3月
- Urist J (1977) The Rorshach Test and Assessment of Object Relatuons. Journal of Personality Assessment, 41, 3-9.
- (2008年10月20日受稿, 2008年12月20日受理)